

プロ意識

当時、熊本から出ておられた荒汐という親方がいましてね、その部屋に入門したんです。

「あの頃は苦労したなあ」という感じはあまりないですね。当時の相撲社会というものは、今と違いましたね、毅然たるプロだという考えが強かった。確かに実力もありましたからね。最近はず学生出身者がトントン拍子に出世しますけれど、その頃は、相撲というものはなかなか出世できないものだという風潮がありましたからね。

またけいこの内容でも今とはあらゆる面で違っていました。

私が現役の時の体重は百七キロが最高で、どうしても太ることができなかったんですよ。体重がモノをいう世界ですからね。柔道みたいに国際式ではないですよ。粒の揃った人たちがかりでもおもしろくないでしょうね。小さな人が大きい人を相手にどのような相撲を取るだろうか、どうやって倒すだろうかということも相撲の面白さの一つですからね。

私みたいなやせっぽちが、まともにはいってんではとても勝てません。

それで何んとかして太りたいと思いついてね。三段目に上がった時に、どうしても太れないんですから胃腸が悪いの

ではないかということ入院したんですよ。ところがどこも悪くはない、それならということでも今度は断食を始めましてね。それを二週間やっただけです。それから体重が四十五キロになったんです。それから徐々に太ってはきたんですがね。それでも十両に上がった時も本場に細くてね、全く洗たく板みたいな胸をしていましたよ。その頃は毎日毎日「太りたい」とその事ばかり考えていましたね。

また当時はね、今と違って階級的に楽にならないと太れないんだという風潮もあつたんですよ。

だから体重のない人は、どうしても考えた相撲を取らなくちゃならない。まともな相撲だつたらとても勝ち目はないですからね。

けいこにしたって自分に合ったけいこをしなくてはならない。また人一倍けいこしなくてはならないということですからね。

皆が寝ている午前二時頃から一人起きて鉄砲したり、四股を踏んだりしてましたよ。

相撲の神様

私は十七歳の時に、荒汐部屋に入門したんです。初土俵は昭和十六年の一月場所でした。その頃は本場所が一月と五月の年二場所でしたからね。

私とはとても恵まれていましたからね。私はとても恵まれていましたよ。

今は立田川部屋で後輩の指導にあたると共に協会では審判委員を努めています。

大切にしたい礼儀

戦後の相撲社会も大きく変わりましたよ。今の若い人たちに一番欠けているのは礼儀ですね。相撲は礼に始まって礼に終わるスポーツですからね。人間形成の基になるのはやはり礼儀なんですよ。何事も礼儀から発しないとすべてのものがうまくいきません。

それから今の人たちは、あきらめが早いといえますか、粘りが足りません。自分でとことん突きつめていくということがありませんね。私も毎日、けいこ場に来る指導していますがね。若い人たちを見ていて、この人にはこういう相撲の型がいいんだと、私は永年見えてきますからわかるんですよ。だから相撲の基本の上になつて個々の特技を見出して身につけていくということを指導しているんですが、なかなかうまくいきませんね。

言っている時は何とか聞いているが、翌日になると忘れてしまっている。これの繰返しなんです。先輩の言ったことをできるだけかみくだいて身につければ進歩も速いと思うんですよ。世の中はいろいろ変化していくけれども土俵は少し

双葉山が立浪部屋から独立して新たに時津風部屋をつくったのもその頃なんです。双葉山といえは私にとつては神様みたいな人だつたですからね。

私のいた荒汐部屋や外の色々な小さな部屋が一緒になつて時津風部屋ができたんですがね。部屋ができた当初は双葉山道場と呼ばれていましたね。私も寝食は荒汐部屋で、けいこは双葉山道場に通っていました。その頃の相撲取は皆、自分の型を持っていますね。今のようないたり寄つたりの相撲社会ではありませんでした。各々が特技を持っていましたね。この型になつたら絶対に勝てるんだという相撲取が多かったですね。私は左を差して右で上手を取れば、ちょっとした自信はありました。

小相撲

年二場所の時代だつたですからね。五月場所が終わると翌年の一月までは場所がないもんですからね。その半年間は巡業ばかりでしたよ。軍の慰問で中国大陸巡業をやったりしてましたね。主流が大編成の大陸巡業を行うと、大陸巡業にもれた人たちは内地を巡業したりして色々別れて巡っていました。幕内が頭、あるいは十両、幕下が頭となつて関取さんのいないごく少人数の相撲取ばかりの一行で「小相撲」と称して小さな田舎まで巡りましたよ。ある時は地方の素人相撲の人

も変わっていないんですから。土俵から上がった好き勝手なことをしてもいいけれど、土俵の人生というものは今も昔も同じなんです。相撲技にしたって、昔の人は自分にあつたものを研究して型をつくらせていたんですが、今の人たちはカッコいいのをまねばかりして、自分の個性を伸ばさずとしないですね。

審判委員

以前は検査役と言っていたんですが、審判部が独立して名称も変わりました。私も審判委員になつて十三年になりますよ。

物言いの一番はビデオで判定した方がいいんじゃないかという意見もあります。が、カメラの角度もありますし、特に土俵際のもつれはビデオではわからないんですよ。俵の外には蛇の目という細かい砂がまいてあつてね、ちょっと触っただけで跡がつくんですよ。かかとがついた、つかないはビデオではわかりにくい面もあるんですよ。四方から見ているんですから目で見た感覚というのも大事ではないでしょうか。それかといって私はビデオ不必要論者ではないんです。現に今でもビデオでもやっていますし、土俵の審議の参考にはしているんです。もつれた相撲で判定が機敏ファンとくい違つたりすると審判部は抗議の電話が鳴りつ放しですよ。しかし現場で見ている目とテレビとは違いがあるんですよ。

たちと相撲を取つたりしてね。その頃は地方相撲も非常に盛んでしたし、また強い人もおりましたよ。

今は大相撲は盛んなんですが、昔のような宮相撲が少なくなりましたね。まわしをいまして相撲を取るといふ若者があまりいませんね。北海道や東北地方のように相撲が盛んな地方ほど相撲取も多くでいますね。今の花形力士も北の方に偏っていますね。最近はず九州地方も少なくなりました。熊本出身の関取が一人もいないのもちょっと寂しいですね。

初の殊勲賞

昭和三十四年の五月場所初めて殊勲賞を受賞しましたね。もうだいぶん年をとつてからなんです。この場所は西前頭四枚目でした。たしか三日目に新横綱の朝潮閣を上手投げで破り、初の金星を獲得し、四日目に横綱栃錦閣と対戦しましたね。この一番は今でも心に残っていますよ。水入りの相撲を二度やりましてね、勝負がつかないものだから十分後に取り直しということになつたんです。水入りの相撲は、組み直す時、足の位置など前の組み手をそのままつくるのですが、この時が一番つかれましてね。どうしようか、こうしようか色々考えて、精神的にとつつかれるんですよ。結局十分後の取り直しで敗けてしまったんですが、終わつてから、「ああ疲れ

望郷

結婚は私は早くも十両の時だったんですよ。二十六歳の時でした。家内もやっぱり熊本だったんですが、もう亡くなつて十年になります。私の仕事は名古屋大阪、九州と一カ所に落ち着いていないもんですからね。家をあげる機会が多くて、男の子が二人いましたし、亡くなつた時はとても困りましたよ。

もう親兄弟もいませんしね、熊本にはあまり帰っていないんですよ。地方巡業の時でも帰りたいと思つておるんですが、なかなか雑用が多くてね。熊本も変わつていましてね。街もかなりきれいになっていましてね。地方都市としては大きい方でしょう。一度帰つてみたいとは思っているんですがね。時々、テレビなどで熊本の風景を見ることがありますが、とてもなつかしいですね。それにしても熊本は観光宣伝が少ないような気がします。熊本の美しい水、自然はこれからも大切にしたいと思つています。

